

## <追悼文>中本正智先生の死を悼む

安江, 孝司

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

37

(発行年 / Year)

1995-02-24

## 中本正智先生の死を悼む

安江孝司

中本正智先生の訃報に接した日に、僕は、日記に、こう書き記している－「正智先生が逝く。享年59歳。誠に惜しい。人生80年だというのに、これは何としたことだ。許せない。残念だ。無念だ。神の采配に間違いがあったのではないか。そうでもなければ、僕は神を恨む」と。

ところが、先生のご葬儀の日のページには、

「正智先生のご葬儀に参列。〔比嘉〕実さん〔現法政大学沖縄文化研究所所長〕の弔辞は、切々として僕の胸にも迫った。泣けた。

斎場では、僕もお骨を拾わせていただいた。最後に、中本家での御斎を、〔沖文研関係者では〕山本弘文先生、東喜望先生、実さん、そして僕とで、戴いて、帰途につく。

それにしても、今日は、驚いた。あの正智先生がクリスチャン（カトリック）であったとは！僕は、無論、存じ上げなかったことであったが、ご葬儀参列のどなたも（僕がお尋ねした限りでは）、先生が神の子を認じておられたお人であるということをご承知のお方はおられなかった。どうして先生は、その事実を、僕らに告げなかったのだろうか？ 疑問が残る。もしかしたら、お酒と関係があったのかも。先生もよくお飲みになられたからなあ。神は、深酒や酔っ払いを嫌うといわれるから、先生にしても恥ずかしさが先に立ってクリスチャンたることの公言を憚られたのかもね。

酒飲みの僕だからな、こんなふう解釈するのは!? 僕は宗教的音痴だからな。

先生がキリストの子にして、その神は絶対的超越者であるのだから、先生のお生命いのちを召されたのも神の御業なれば、そこに過ちはない、ということか。そして、先生も、靈的に、ご承知なさっておられたのかも知れない。であるなら、僕が、先生のことで、神をお恨み申すというのは筋違いなのかも。

それにしても、早すぎのご逝去だよ。残念ですよ、無念ですよ、神様!!」

と僕は記している。

読み返してみて、われながらひどい非論理的な文であることにあきれるが、日記だということでご勘弁いただいたうえで、この拙文をもって、僕の正智先生への哀悼の辞とさせていただきます。

神よ、中本正智先生に、安らかな永眠を。

（法政大学第一教養部教授）